

大館市文化財調査報告書 第9集

2012年ニホンザリガニ及び  
アメリカザリガニ生息分布調査報告書

2013年3月

秋田県大館市教育委員会



口絵1 ニホンザリガニ (大館10) 2012.8.24撮影



口絵2 アメリカザリガニ (大館3) 2012.8.3撮影



口絵3 ニホンザリガニ生息地（大館10） 2012.8.24撮影



口絵4 アメリカザリガニ生息地（大館11） 2012.8.25撮影

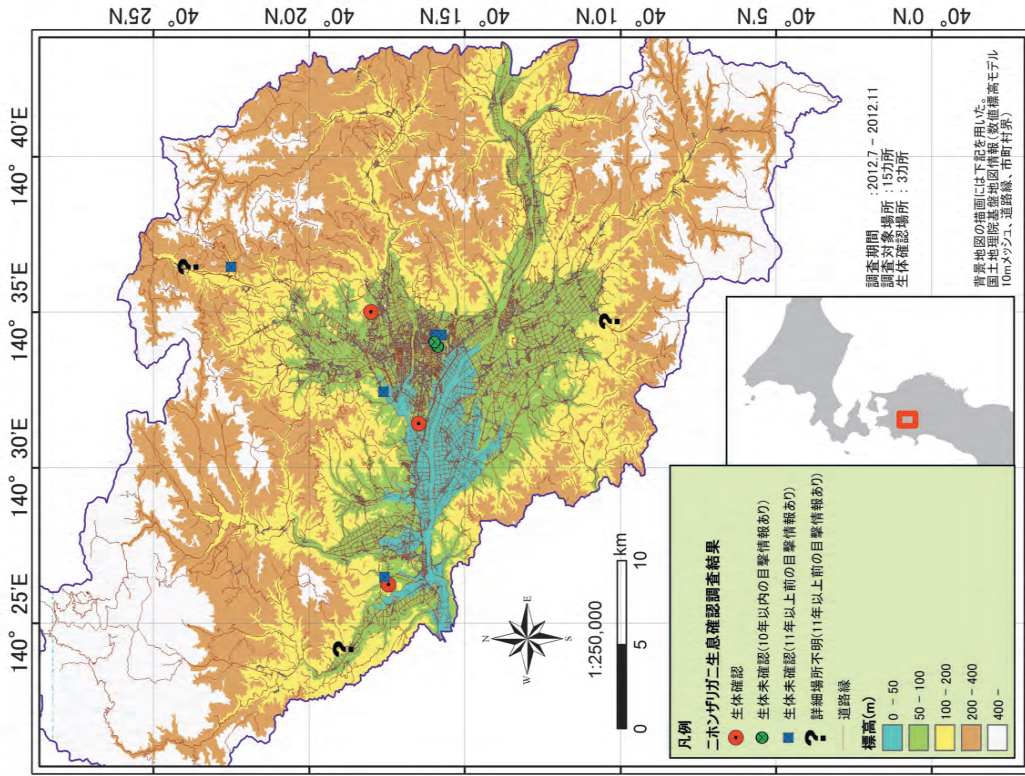


口絵5 尾節後端に切れ込みがない個体（大館10）2012.8.21 撮影



口絵6 尾節後端に切れ込みがある個体（田代2）2012.7.27撮影

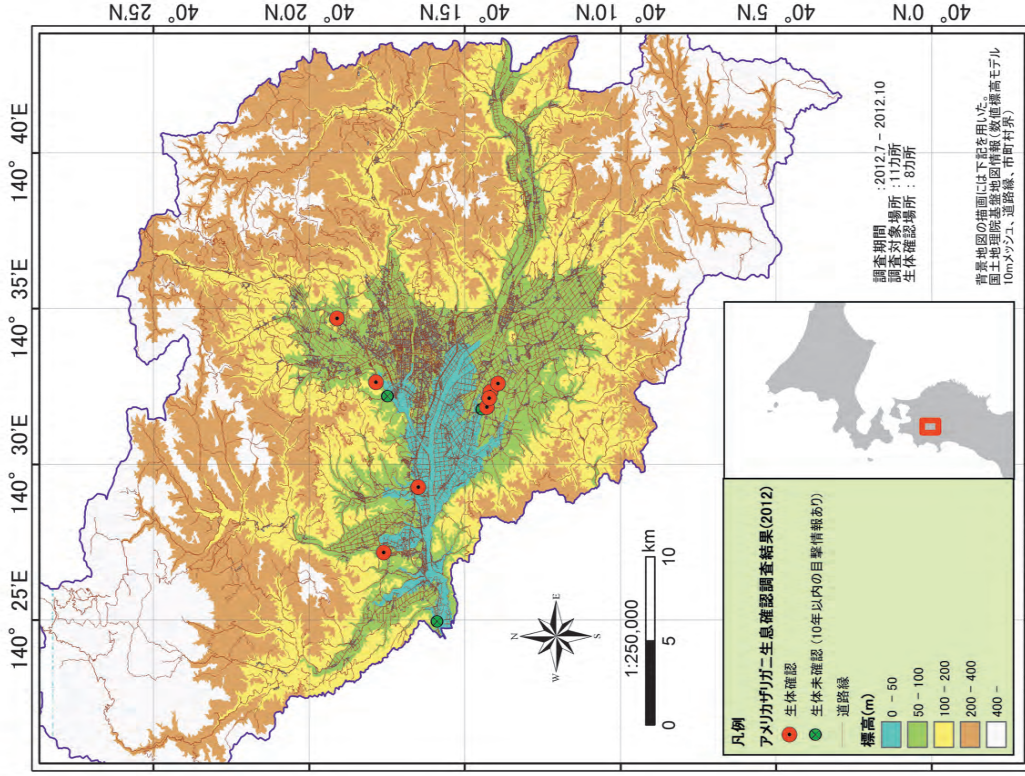
ニホンザリガニ生息分布図  
2012年秋田県大館市



調査・作図:大館郷土博物館  
作成日:2012年12月

口絵7 ニホンザリガニ生息分布図

アメリカザリガニ生息分布図  
2012年秋田県大館市



調査・作図:大館郷土博物館  
作成日:2012年12月

口絵8 アメリカザリガニ生息分布図

## まえがき

大館地方のニホンザリガニは、江戸時代中期のころから文献に登場します。古くから、薬用や食用に用いられ、人間の生活に密着した存在でした。大館市の八幡沢は、ニホンザリガニ生息の南限に当たるため、1934年に「ザリガニ生息地」として国の天然記念物に指定されました。ところが、1960～1970年代に、周辺の宅地化が急速に進んだことにより、生活排水が生息地に流入するようになり、また、それに伴う水路のコンクリート施工により、生息環境が悪化し、近年は目撃情報が著しく減少している状況です。

北海道大学の小泉氏らのDNA解析による最近の研究成果によると、ニホンザリガニは札幌近郊に起源があり、ここから南北に生息域を広げ、150万年前頃に青森まで南下していたと推定されています。ニホンザリガニは、地域固有性が非常に高く河川（湖沼）ごとに独自のDNAをもつため、ニホンザリガニには、北日本の地史・古環境など、北日本の歴史が残されており、現在進行している地域個体群の絶滅が、歴史遺産の損失に繋がることも懸念されています。

大館市では2003～2004年に市内のニホンザリガニの生息調査を行いました。生息数が多い場所がある一方で、一部が天然記念物指定地「ザリガニ生息地」となっている八幡沢の個体群の数は極めて少ない状況であることが確認されました。それから約10年を経て、現況を再度把握する必要があることから、市民の皆さまから目撃情報を収集し、現況を調査することになりました。市町合併後の初めての調査であり、比内、田代地域も対象となるため、新たな生息地の確認が期待される場所です。

また、当地方には外来種のアメリカザリガニも生息していますが、市全域を対象とした生息分布調査はこれまで実施されたことがなく、実態がよくわからない状況でした。よって、本調査では、アメリカザリガニも調査対象とすることとして、在来種、外来種、両方の生息分布の概況を把握したいと考えています。

本調査の結果が、ニホンザリガニの保全対策や環境教育などの基礎資料となれば幸いです。

本調査研究事業は、秋田県緊急雇用創出等臨時対策基金事業を活用して実施することができました。この紙面を借りて関係各位に感謝申し上げます。

平成25年3月

大館市教育委員会  
教育長 高橋善之

## 例 言

1. 本書は、秋田県大館市全域（913.7㎡）を対象とした、ニホンザリガニ及びアメリカザリガニの生息分布調査報告書である。
2. 本事業は、平成24年度に、秋田県緊急雇用創出等臨時対策基金事業に採択された「郷土の自然環境に関する調査研究事業」の一部として実施した。
3. 本事業の準備・調査・資料整理・執筆期間は、2012年（平成24年）4月から2013年（平成25年）3月である。このうち、現地調査に当たった期間は、2012年（平成24年）7月～同年11月である。
4. 調査主体は、大館市教育委員会で、調査体制は下記のとおりである。

指導・助言：長崎 富雄（大館郷土博物館運営審議会委員）

調査員：石井 隆（大館市教育委員会 教育次長）

若宮 司（大館市教育委員会 大館郷土博物館館長）

鳥潟 幸男（大館市教育委員会 大館郷土博物館主査）

武田 寧子（大館市教育委員会 大館郷土博物館臨時職員）※

高瀬 広行（大館市教育委員会 大館郷土博物館臨時職員）

福山 明美（大館市教育委員会 大館郷土博物館臨時職員）※

石代 純也（大館市教育委員会 大館郷土博物館臨時職員）※

笹木 沙織（大館市教育委員会 大館郷土博物館臨時職員）

笹木 和美（大館市教育委員会 大館郷土博物館臨時職員）

伊藤 圭祐（大館市教育委員会 大館郷土博物館臨時職員）

佐藤 美恵子（大館市教育委員会 大館郷土博物館臨時職員）

※2013年2月までに退職

5. 本調査報告書の編集・執筆は大館郷土博物館職員が行った。

# 目 次

まえがき	v
例言	vi
1. はじめに	1
2. 調査対象地の選定と調査方法	3
2.1 調査対象地の選定	3
2.2 現地調査の方法及び調査項目	
2.2.1 調査方法	4
2.2.2 調査項目	4
2.3 生息分布図の作成	5
3. 調査結果	5
3.1 ニホンザリガニの分布調査結果	5
3.2 大館10に生息するニホンザリガニの詳細	19
3.3 市内に生息しているニホンザリガニの尾節後端の形態の違い	23
3.4 アメリカザリガニの分布調査結果	24
4. ニホンザリガニ保全の方向性	32
5. まとめ	32
謝辞	33
引用文献	33
資料	35
現地調査票（各調査地点の詳細）	37
現地調査写真	73





## 1. はじめに

淡水ザリガニは世界で 640 種類以上知られている (Crandall and Buhay, 2008) が、このうち極東アジアには、わずか 4 種類だけ生息している (Ko and Kawai, 2001)。このうちの 하나가ニホンザリガニ (*Cambaroides japonicus*) であり、これは日本にのみ生息する在来種である (川井, 2007)。

ニホンザリガニは、大館周辺では「サルカニ」とも呼ばれ、江戸時代中期のころから文献に登場する。津村正恭が著した紀行によれば、18 世紀後半、極楽寺<sup>1</sup>の庭の池にニホンザリガニが生息しており、薬用として用いられていた (津村, 1977)。また、久保田藩の御境目奉行 井口経包 (つねかね) が 1789 年に大館巡見の際は、大館山役人 岸八郎右エ門宅での馳走に、ザリガニの吸物があった (井上ほか編, 1972)。また、1909 年、韓国皇太子が大館駅に立ち寄った際は、大館尋常小学校が、「さり蟹」を献進している (笹島編, 1973)。このように、当地方では、ニホンザリガニは、江戸・明治期に既に、食または薬用として利用されていた。

ニホンザリガニの生息分布は、北海道と青森県の全域、秋田・岩手両県北部の一部であるが、各地で生息個体数の減少が著しく、環境省第 4 次レッドリスト (2012) で、ニホンザリガニは、絶滅危惧Ⅱ類 (VU) として選定されている。また、隣接県の青森県レッドデータブック (2010 年改訂版) では、重要希少野生生物 (B ランク)<sup>2</sup>に、いわてレッドデータブック (2001) では B ランク<sup>3</sup>に位置付けられている。

大館市の八幡沢にあるニホンザリガニ生息地は、日本における生息地の南限であり、その保存を図る必要があるとされる (鍋木, 1932) ため、1934 年 (昭和 9 年) に、「ザリガニ生息地」として、国の天然記念物に指定された。ところが、指定地周辺は、昭和 30 年代から宅地化が進み、特に昭和 40 年代には、急速に宅地化が進展し、水路を取り巻く環境は大きく変化した。その結果、指定地の水路は降雨後に増水を繰り返すようになり、道路や宅地に汚水が溢れ出し、悪臭が漂う環境となった。その後、市が地元からの陳情を受けて、生活排水の流化促進及び生活環境改善のため、1980～1981 年に、コンクリート U 字溝を設置した。このような経緯を経て、ニホンザリガニの生息環境は極めて悪化し、近年は水路が舗装化されていないごく一部の湧水地に離散的に見られるようになってきている。

大館市教育委員会が 1989～1990 年に、旧大館市域を対象に実施したニホンザリガニの生息分布調査によれば、市内で生息が確認されたのは指定地外の 2 カ所のみである (大館市教育委員会, 1990)。同じく大館市教育委員会が 2002～2003 年に実施した調査では、指定地内 1 カ所、指定地外 1 カ所の 2 カ所でのみ生息を確認している (大館市教育委員会, 2004)。その後、指定地内では、目撃情報はあったものの、公的な確認はなく、2011 年の簡易調査でも生体は確認されなかった。

本調査では、改めて、市内全域を対象に生息確認調査を行い、生息分布図を作成して現況を把握することとする。また、本調査は、過去に行った前述 2 調査の追跡調査として位置づけられるが、2005 年に市町合併し、市域が拡大 (旧比内町と旧田代町が加わった) したことから、調査対象地域を拡大しており、新たな生息地の発見が期待される。

なお、大館市にはアメリカザリガニ (*Procambarus clarkii*) も生息している。アメリカザリガニは、温暖な地域を好む種で、日本では、1927 年にウシガエルの餌として神奈川県鎌倉市大船に最初に導入された外来種である (川井, 2007)。環境省の要注意外来生物リストに選定されており、「被害に係る一定の知見はあり、引き続き特定外来生物等への指定の適否について検討する外来生物」に区分されている。

現在、アメリカザリガニは日本全国に広く分布しているが、もともと国内に生息していたもの

<sup>1</sup> 現在この位置は墓地となっているが、極楽寺の建物は現存していない。この場所は、八幡沢 (天然記念物指定地) の上流域に相当する。

<sup>2</sup> 環境省レッドリストの絶滅危惧Ⅱ類 (VU) に相当

<sup>3</sup> 環境省レッドリストの絶滅危惧Ⅱ類 (VU) に相当

ではなく、人間の放流により分布域が急速に拡大した（川井・高畑，2010）。大館市域全域を対象とした、外来のアメリカザリガニの生息分布調査の事例はこれまでない。よって、本調査では、アメリカザリガニの生息分布調査も行い、生息分布の現況を明らかにする。

なお、本調査は、秋田県緊急雇用創出等臨時対策基金事業を活用して、「郷土の自然環境に関する調査研究事業」の一部として、実施するものである。

表1 ニホンザリガニに関する経緯

西暦	和暦	内容
18世紀後半	江戸中期	津村正恭が、1788年（天明8年）霜月15日～翌年卯月に江戸を出発して秋田に赴き著した紀行の中で、大館の極楽寺の庭の池にいる「しさり蟹」（ニホンザリガニと推定される）について言及し、薬用として用いられていることを記述。
1789.4.8	寛政元	『伊頭園茶話』（いずえんさわ 新秋田叢書9巻）に、大館地方を巡見中であつた久保田藩の御境目奉行 井口経包（つねかね）が、大館山役人 岸八郎衛門宅に招待を受け、そこで出された料理の中に、ザリガニの入った吸物があつたことを記述。
1909.8	明治42	韓国皇太子が北海道御巡遊の帰途、大館駅で、大館尋常小学校が、「とけうお、さり蟹」を献進。
1934.1.22	昭和9	大館市の桜町南・池内道下の一部区域が、「ザリガニ生息地」として、国の天然記念物に指定される。
1963.	昭和38	大館鳳鳴高校生物部が、指定地の現地調査をし、指定区域の用水路に各家庭の下水が流入し、指定区域の3分の2で、生息を確認できない旨報告。 <sup>4</sup>
1975	昭和50	大館鳳鳴高校生物部が、指定地とその周辺を調査し、6/21は、指定地で9匹、近傍で3匹、8/27は指定地で16匹、近傍で2匹確認する。 <sup>5</sup>
1977.8.19	昭和52	秋田大学加藤教授による現地調査。2匹確認。
1980～1981	昭和55～56	1977年に桜町町内会から排水路整備の陳情書が提出され、池内道下地内にU字溝が設置される。
1981.8.6～8.7	昭和56	大館鳳鳴高校が大館10でニホンザリガニの生体を約184匹確認。
1982.8.31	昭和57	秋田県教育委員会に、ザリガニ生息地現状報告書を提出。
1989.4～1990.2	平成元～2	旧大館市域を対象にザリガニ生息地緊急調査を実施。大館10と他1カ所で生体を確認。
1989～1990ごろ	平成元～2ごろ	大館東中学校科学部が調査をし、田代1で生体を確認した旨報告。
1990.3	平成2	大館市教育委員会が、「国指定天然記念物 ザリガニ生息地分布調査報告書」を刊行。
1999.6.2	平成11	秋田県教育庁文化課職員が指定地周辺の現況調査。
2002.7.15	平成14	ニホンザリガニ緊急調査委員会が市内4カ所で現地調査。
2003.6.20	平成15	ニホンザリガニ緊急調査委員会現地調査。
2004.3.31	平成16	大館市教育委員会が、「ザリガニ生息地緊急調査報告書」を刊行。

<sup>4</sup> 鈴木ほか（1963）

<sup>5</sup> 大館鳳鳴高等学校生物部（1975）

西暦	和暦	内容
2011.10	平成23	大館郷土博物館が、餅田で生体を確認するが、池内道下では確認できず。
2012.6～2012.11	平成24	大館郷土博物館が、ニホンザリガニ及びアメリカザリガニ生息分布調査を実施。調査対象 26 カ所のうち、3 カ所でニホンザリガニの生体を確認し、11 カ所でアメリカザリガニの生体を確認。八幡沢の指定地での生体確認はなし。

## 2. 調査対象地の選定と調査方法

市民からの目撃情報、過去の文献資料、現地での聞き込み情報などに基づき、調査対象地を決定した。調査対象地では、生体の有無を確認するとともに、体長、頭胸甲長、体重、性、水質（水素イオン濃度、電気伝導度）などの測定を行った。

### 2.1. 調査対象地の選定

調査対象地の選定に当たっては、まず市民にニホンザリガニ及びアメリカザリガニの目撃情報の提供を呼びかけた。小学生は、昆虫や小動物探しなどの野外遊びをしてザリガニを見たり捕獲したりする機会が多いと考えられたため、市内全 18 小学校の全児童 3564 人に学校を通じて調査票を配布し情報を募った。このほか、市内の中央図書館、中央公民館、地区公民館全 11 館などにザリガニ調査票を配布し、情報提供を呼びかけた。また、市ホームページ、市広報紙、北鹿新聞、大館新報、大館ケーブルテレビなどの媒体を通じても情報を募集した。

その結果、調査票による情報提供は、19 人（小学生 18 人、一般 1 人）から 22 件あり、重複を除いた目撃箇所は、9 カ所（ニホンザリガニ 2 カ所、アメリカザリガニ 7 カ所）であった。このほか、過去の文献資料や大館郷土博物館による現地聞き込み調査等に基づいた 17 カ所を加え、計 26 カ所を本調査の対象地とした（表 2 参照）。

なお、生息地保護及び近隣住民のプライバシー保護のため、位置が特定できるような経緯度データや具体的な地点名称は非公開とした。

表 2. ザリガニ生息分布調査対象地

番号	地点番	地点名	経緯度	情報提供件数				種別	
				小学校	一般	間込等	計	ニホンザリガニ	アメリカザリガニ
1	大館 1	釈迦内北	非公開	9	0	0	9		○
2	大館 2	二井田 1	非公開	0	0	0	0		○
3	大館 3	二井田 2	非公開	4	1	2	7		○
4	大館 4	二井田 3	非公開	1	0	1	2		○
5	大館 5	松木	非公開	1	0	3	4		○
6	大館 6		非公開	1	0	2	3	○	
7	大館 7		非公開	0	0	1	1	○	
8	大館 8		非公開	0	0	1	1	○	
9	大館 9		非公開	0	0	1	1	○	
10	大館 10		非公開	1	0	1	2	○	
11	大館 11	川口	非公開	0	0	1	1		○
12	大館 12	沼館 1	非公開	0	0	1	1		○
13	大館 13		非公開	0	0	1	1	○	

番号	地点番	地点名	経緯度	情報提供件数				種別	
				小学校	一般	間込等	計	ニホンザリガニ	アメリカザリガニ
14	大館 14	二井田 4	非公開	1	0	1	2		○
15	大館 15	二井田 5	非公開	1	0	1	2		○
16	大館 16		非公開	0	0	1	1	○	
17	大館 17		非公開	0	0	3	3	○	
18	大館 18		非公開	0	0	1	1	○	
19	大館 19		非公開	0	0	1	1	○	
20	大館 20		非公開	0	0	0	0	○	
21	比内 1		非公開	0	0	1	1	○	
22	田代 1		非公開	0	0	5	5	○	
23	田代 2		非公開	0	0	2	2	○	
24	田代 3	上岩瀬塚ノ岱	非公開	2	0	3	5		○
25	田代 4		非公開	0	0	1	1	○	
26	田代 5	長坂	非公開	0	0	1	1		○
計				21	1	36	58	15	11

## 2.2 現地調査の方法及び調査項目

### 2.2.1. 調査方法

現地周辺で聞き込みを行った後、対象水路の広範囲を対象に、個体が見られないか、生息の有無を確認した。生体を確認された場合、調査対象方形区（1m × 1m）を流路に設け、捕獲して全数調査した。対象水路の流路長が長い大館 10 や田代 2 の場合は、流路に 5m 間隔で調査対象方形区（1m × 1m）を設けて、全ての方形区を対象に調査を実施した。

なお、アメリカザリガニの場合は生体の確認を主としたために、対象となる水路全体に 5m 間隔に調査対象方形区を設けることはしなかった。

このほか、水質や生息環境を記録した。調査項目は下記のとおりである。

### 2.2.2. 調査項目

#### 【生息地について】

##### ・経緯度

経緯度は、Garmin 社製 ハンディ GPS MAP62SJ で計測した。なお、計測値は、生息地保護のため非公開とした。

##### ・土地利用

目視で確認した。

##### ・水面幅及び水深

スタッフで計測した。

##### ・底質

レキ（64-16mm）、砂利（16-2mm）、砂泥（2mm 以下）に区分して、目視で確認した。

##### ・水路への落葉状況

目視で確認した。

- ・湧水の有無  
目視及び水温で確認した。
- ・水温  
T&D おんどとり Jr RTR502 で測定した。
- ・水素イオン濃度  
Horiba B-212 twin pH を使用して計測した。3回採水して3回の測定値を平均した。
- ・電気伝導度  
Horiba B-173 twin Cond を使用して計測した。3回採水して3回の測定値を平均した。
- ・その他の生物  
調査中に発見した主な生物を記した。

#### 【個体について】

- ・体長  
ノギスで計測した。
- ・頭胸甲長  
ノギスで計測した。
- ・体重  
電子秤で計測した。
- ・雌雄の別  
目視で確認した。
- ・鋏脚の有無  
目視で確認した。
- ・抱卵の有無  
目視で確認した。
- ・尾節後端の切れ込みの有無  
目視で確認した。

### 2.3 生息分布図の作成

生息分布図の作成に当たっては、ESRI社製の地理情報システムソフトウェア「ArcGIS 10」を用いた。市町村界、数値標高モデル10mメッシュ、道路線、水崖線、建築物は、国土地理院の基盤地図情報ダウンロードサービスから、人口集中地区（DID）は、国土交通省国土数値情報ダウンロードサービスからダウンロードして用いた。

## 3. 調査結果

### 3.1. ニホンザリガニの分布調査結果

住民からの情報提供及び聞き込みにより目撃事例があった場所は、大館市内の北部、南部、西部の広範囲に渡るが、山地での目撃例は少なく、大部分が集落周辺や耕作地周辺であった。生息を確認した地点及び直近10年以内の目撃情報がある地点は、図1で示されるとおり、5カ所であった。

本調査では、大館10、大館20、田代2の3カ所でニホンザリガニの生息を確認した。大館10は、以前から生息地として知られている場所であり、今回200匹を超える生体を確認した。田代2は、大館郷土博物館は初めて生体を確認する場所であり、12匹の生体を確認した。田代2から約400m離れた集落内の住宅地裏の田代1には、ニホンザリガニが過去に生息していたことが、多くの近隣住民に知られているが、今回の調査では確認されなかった。最近では、平成元年ごろに東中学校科学部が生体を確認している（大館市立東中学校、発行年不明）。大館20では、生体

を 11 匹確認した。大館郷土博物館は 2003 年に、大館 10 の土地所有者の許可を得て捕獲した個体数匹を 市内 の市有地に放流実験しており、この子孫であると考えられる。

このほか、かねてから生息が確認されてきた大館 6 は、聞き取り調査当日の朝に草刈作業員が生体を確認したという有力な情報を得たが、土地所有者の許可が得られなかったため現地調査を断念した。

また、「ニホンザリガニ生息地」として、天然記念物に指定されている桜町南及び池内道下の指定地内では、生息を確認できなかった。

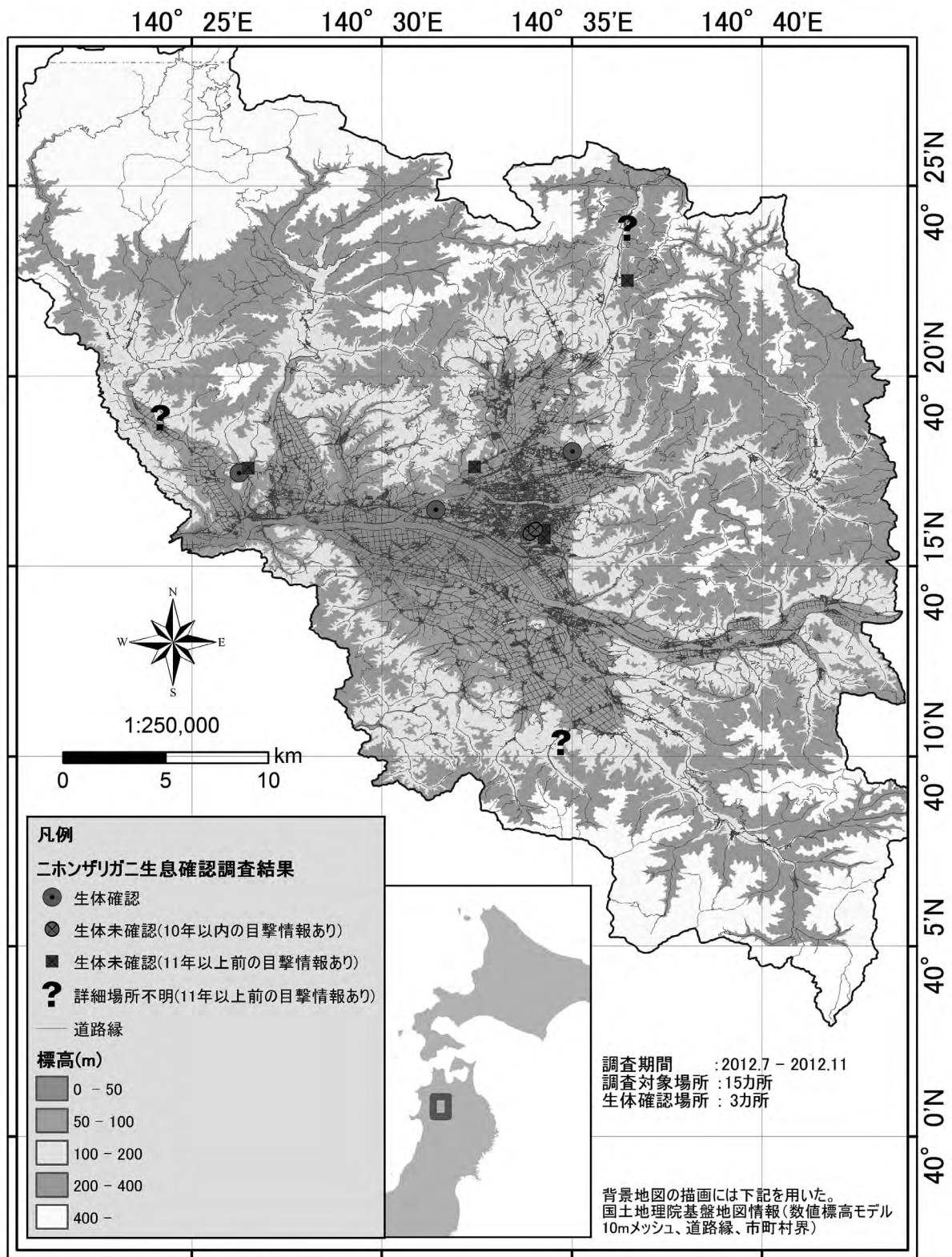
表 3. ニホンザリガニ生息確認調査結果概要

地点 番号	2012 年調査		生体目撃時期 (市民情報)	摘要 (現地調査及び聞き取り調査の結果、ほか)
	調査日	生体 確認数		
大館 6	未調査	×	2005 年～現在	1989～1990 年の調査で生息確認済みの場所。土地所有者の意向で現地調査は行わない。 (聞取) 2011.10 及び 2012.8 に有力な生体確認情報。
大館 7	9/21 9/25	0	1980 年代前半	(聞取) 1980 年代前半、ザリガニ捕りをして遊んだ。 (現地調査) 広葉樹の林内で、湧水時でも水量があり、水温は 13-16℃。湧水あり。
大館 8	9/21	0	1950 年代後半	(聞取) 土地改変により、現在水路はないが 50 - 60 年前は水路があった。(聞取) 当時この水路は大館 6 に流下していた。
大館 9	9/21	0	～ 2008 年ごろ	国天然記念物指定地
大館 10	8/22 8/23 8/24	231	1954 年～現在	(現地調査) 生体確認数は 10 年前調査より増加。尾部後端の切れ込みは認められない。
大館 13	9/12	0	2005・2006 年ごろ ～ 2010 年	
大館 16	9/21 9/29	0	1947・1948 年ごろ ～地滑り発生 (1989) のころまで	(聞取) 地滑り及び復旧・対策工事により土地の環境が大きく変化し、その後、見られない。 (聞取) 1947・1948 年ごろから 40 年間にわたり確認している。 (聞取) 冷風穴地帯。付近の斜面に過去、高山植物が自生していた。 (現地調査) 水温は非常に低い (9/29 で 10.1℃)。
大館 17	未調査	×	1990 年代前半	(現地調査) 場所特定できず。 (聞取) 20 年ほど前、矢立小学校の児童が生体を捕獲
大館 18	9/21、25	0		(現地調査) 近傍の個人宅の庭に湧水地あり。
大館 19	9/29	0	～ 1980 年代前半	(聞取) 1980 年代前半、ザリガニ捕りをして遊んだ。
大館 20	11/27	11		(聞取) 2003 年に大館 10 の個体を放流。
比内 1	未調査	×	～ 2000 年代前半	(現地調査) 場所特定できず。

地点 番号	2012年調査		生体目撃時期 (市民情報)	摘要 (現地調査及び聞き取り調査の結果, ほか)
	調査日	生体 確認数		
田代1	8/17	0	1920年代前半～ 1970年代	<p>集落4住民の住宅裏の林を流れる水路。 (聞取) 40-50年前, ニホンザリガニがたくさん生息していた。 (聞取) 農薬の使用によりザリガニの姿が見えなくなって今はいない。 (聞取) 90年ほど前, 武田氏の祖父が津軽の百沢から持ち帰り放流した。</p>
田代2	7/21 7/27	12	2008年ごろ	<p>(現地調査) 尾部後端に切れ込みあり。 (聞取) 水田脇の水路の泥上げ時に毎年確認していたが, 4, 5年前に耕作をやめた後は確認していない。 大館郷土博物館は初めて確認する場所。</p>
田代4	9/13	×	40～50年前	(現地調査) 場所特定できず。
計		254		



# ニホンザリガニ生息分布図 2012年秋田県大館市



調査・作図: 大館郷土博物館  
 作成日: 2012年12月

図 1 ニホンザリガニ生息分布図 …口絵 7 参照

下記に、生息が確認された場所及び生息が確認されなくても有力な情報が寄せられた地点の結果について記述する。

#### 【大館 6】

(1) 生息の有無・個体確認数

土地所有者の意向により、現地調査をしていないが、1989年の大館市教育委員会による調査では、生息が確認されている。また、住民からの有力な目撃情報もある。市民からの目撃情報に基づき、大館郷土博物館が現地の位置確認に訪れた日、現地の草刈り作業員が同日の朝にニホンザリガニの生体を確認したとの情報が近隣住民から寄せられた。

(2) 形態的特徴

不明

(3) 生息環境、ほか

上流部は、耕作地またはスギの植林が見られる。周辺は住宅地。

#### 【大館 10】

(1) 生息の有無・個体確認数

生体を 231 匹、死骸を 2 匹確認した。生体確認数は 9 年前(2003 年)の同時期の調査(表 8 参照)に比べて 39% 増加し、繁殖活動は維持されているようである。生息個体数密度は 14.4 匹 / m<sup>2</sup> であり、個体数密度に水路面積を乗じて対象水路全体の個体数を推定したところ 2107 匹となった。

(2) 形態的特徴

尾節中央の後端部に切れ込みは見られなかった。大館 10 で捕獲・計測した生体 231 匹の全長は、平均 32.5 mm、(最大値 60.4 mm、最小値 10.0 mm)、頭胸甲長は、平均 15.9 mm (最大 33.0 mm、最小 4.0 mm)、体重は、平均 2.2g (最大 9.4g、最小 0.1g 未満)であった。

(3) 生息環境、ほか

生息域の小川は、火砕流台地の浸食谷にあり、谷の始まりである湧水源から 70～80m ほどは広葉樹を主体とする樹林帯を流下している。その後、谷は消失し、平坦地の耕作地や民家の敷地内の水路を通り、道路側溝へと流下している。水面幅は 40～540 cm、水深は 1～4 cm で、調査時は渇水期に当たっていたこともあり、水量が非常に少なかった。水温は、水源地付近は 15℃ 前後であったが、流下するとともに上昇し、下流部では 22℃ 台であった。また、水素イオン濃度は、水源地付近では 6.0 前後であったが、下流部では 7.0 に近づいた。生活排水の流入は見られない。

#### 【大館 20】

(1) 生息の有無・個体確認数

生体を 11 匹確認した。

(2) 形態的特徴

尾節中央の後端部に切れ込みは見られなかった。捕獲・計測した生体 11 匹のうち、全長を計測できなかった 1 匹を除く 10 匹の全長平均は、40.1 mm (最大 47.4 mm、最小 34.8 mm)、捕獲・計測した生体 11 匹の頭胸甲長は、平均 15.4 mm (最大 21.9 mm、最小 6.2 mm)、体重は、平均 2.6g (最大 4.9g、最小 0.1g 未満)であった。

(3) 生息環境、ほか

山裾の湧水地。夏の渇水期には流水は見られなかった。毎春、サンショウウオが産卵する。周辺樹木は針葉樹の割合が高い。生活排水の流入は認められない。

頭胸甲長は 6.2～20.3 mm であり、稚エビが 1 匹含まれている。9 年前の 2003 年に大館郷土博物館が大館 10 の個体を数匹当地に放流しており、それが繁殖して世代交代がなされ生息数が増加しているものと考えられる。

### 【田代 1】

(1) 生息の有無・個体確認数

生体は確認されなかった。近隣住民の話でも最近は何体も見かけたことがないとのことである。40年ほど前までは大量に生息していたが、農薬を多用するようになってから激減したとの証言を近隣住民4人から得た。大館東中学校科学部で平成元年ごろに生体を確認しているが、それ以降の記録はない。近隣住民の武田氏によると、90年ほど前、武田氏の祖父が津軽の百沢からたくさん生体を持ち帰り、放流したとのことである。

(2) 形態的特徴

不明

(3) 生息環境、ほか

集落縁辺の傾斜地基部の湧水地から流下している小川。

### 【田代 2】

(1) 生息の有無・個体確認数

生体を12匹、死骸を1匹確認した。

(2) 形態的特徴

多数の個体で、尾節中央の後端部に切れ込みが見られた。捕獲し・計測した生体(12匹)の全長は、平均40.4mm(最大68.6mm, 最小7.6mm)、頭胸甲長は、平均17.7mm(最大29.9mm, 最小4.1mm)、体重は、平均3.8g(最大14.4g, 最小0.1g)であった。

(3) 生息環境、ほか

田代1から、直線距離で400m離れた場所であり、耕作地脇の水路である。山間の耕作地であるため、周囲は山林であり、広葉樹も多い。耕作者は現地で3、4年前まで稲作をしていたが、稲作を営んでいた時代は、毎年泥上げをする時に個体を見かけていたとのことである。

付近に住宅はないため、生活排水の流入は見られない。